

---

# 十三番目の秘術

秋乃夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十三番目の秘術

### 【Zコード】

N4427BA

### 【作者名】

秋乃夜

### 【あらすじ】

戦国時代と見せかけて始まる中世ファンタジー。

イロハは西方から伝わった「天葬」という葬儀に疑問を持ち、大陸東方に作られたヤマト街を出て、神学校に入学する。天葬について調べながら三学年になったある日、イロハは友人から不穏な噂を聞く。神学校内の人間が消失するという事件が国外で起きているらしい、と。その日の午後の講義でイロハは意識を失う。目覚めて目にした光景は。

燃え少し。萌えなし。異世界転生でも主人公最強でもMMOでもな

いので翻訳はないかもですが、生温かい皿で「」見いただければ幸いです。

## 紅葉の中での（前書き）

はじめまして。みなさまへお願ひします。

元旦から投稿を始めようと思つていたのだが、いつになつた……。

## 紅葉の中で

紅葉の朱に包まれた境内に、乾いた音が響いていた。

十に満たないだらう少年と少女が木刀を手に打ち合つてゐる。剣の技量では少女が少年を寄せつけず、力や速さでは少年が少女を圧倒して、結果は互角。

だが、先に息が切れて相手についていけなくなるのは、決まって少女の方だった。

「じゃ、今日は終わつ」

少年がそう宣言して、切つ先を下げた。  
少女としては物足りないが、求めても付き合つてくれないのはわかつていたので彼の言葉に従う。

胴衣の袖で汗を拭う少女の左目の中には傷があった。

ムキになつて少年に突つかかつていつた結果だが、少年の剣によるものではない。

弱つた握力で打ち込んだせいで、剣を弾き飛ばされてしまつたのだ。

それが顔にぶつかつて、目立つ傷をこじらえた結果になつた。

剣を修める家に生まれた少女としては、それくらいの傷は勲章のようなもの。

気にしたのは少年の方だった。

慌てふためいて謝り倒し、責任を取るとまで言い出した。  
そしてそれ以来、少女が疲れを見せるとき相手をしなくなつたのだ。

「イモあるんだ。焼こうぜっ！」

少年は簞を手に、石畳や砂利の上の落ち葉を集め始める。  
疲れ知らずの少年を横目に、少女は溜め息をこぼした。

不条理だ。

年齢は同じで体格もそう違わない。

それなのに、性差で片付けられないほど大きい身体能力の差が一人にはある。

その上、稽古を繰り返すうちに少年の剣の腕前も日に見えて上達している。

そう遠くない先、太刀打ちできなくなる予感があった。

「……おーい、聞いてるか？ 火打ち石もってきてくれってばーっ」「はいはい」

剣を鈍らせるような思考を振り切って、小走りにお勝手へ向かった。

少年が慣れた手つきで火をつけ、枯れ葉から煙が上がる。

狼煙のようだ。

「なんか、尾張の国が強いらしいな……」

煙を見上げながら少年が言つ。  
どうやら、考へることと同じだつたらしい。

「いざれ、攻めてくるかもね……」の薩摩の国にも

極東にある大和の国は、戦乱のまゝただ中にある。  
だが、大和が一つの形に統一されて戦乱が終結したのは  
からわずか一年後のことだった。

それ

## 天葬

黒い僧衣を身に纏つた司祭とその見習い四人が一軒の民家を訪れていた。

「ようこそおいでになりました。司祭様」

一団は家の住人から歓待を受けた。  
心から喜ばれ、望まれ、彼らの家に迎え入れられた。  
だが、司祭たちが足を踏み入れたその家は大きな哀しみで満たされている。

司祭は静かに溜息をつくと、なるべく感情を殺して口を開く。

「して、天葬を所望されたのは  
「こちらです」

家主らしき壯年の男が司祭たちを先導した。  
案内されたのは、いつそう深い哀の感情に沈んだ寢室だった。

「母 キャサリン・テイラーです」

ベッドに横たわる老婦人の姿を確認すると、司祭はその息子たちに視線を移す。

「別れは済まされたか」「……はい。しかと」

頷く家族は一様に涙を溜めている。

「では、キヤサリン・ティラーその人を天へと送りつ

「ご家族の方はお下がりください」

見習いたちは老婦人の子息や孫を下がらせると、自分たちもよう離れた場所に控えた。

司祭はベッドの前で片膝をつき、老婦人に両手をかざした。そして、彼の口が呪いの言葉を厳かに紡いでいく。

「お祖母さま……」

瞳に涙を溜める家族が見守る中、老婦人の体は光の粒に変わり、虚空へと溶けていった。

司祭は立ち上がり、ベッドの上に残された衣服に背を向ける。

「キヤサリン・ティラーを天の御許へ送りました」

「ありがとうございます。ありがとうございます」  
「司祭様と、母を迎えて下さった神に感謝を」

穏やかに微笑む司祭に、故人の家族は謝意を口にして、敬意の眼差しを注ぐ。

天葬の場において、神の代理人とも呼べる司祭は畏敬の対象だ。神の奇跡を垣間見た故人の家族はもちろんのこと、司祭の見習いたちにとつても同様に。

ただ この場には一人だけ例外がいた。

四人いる見習いの中の一人。

その一人だけは、周囲とはまるで異なる視線を司祭に向けていた。

探るような、疑念の視線を。

「ねえ、おばあちゃんは、てんぐくにいったの？」

「そうだよ。おばあちゃんはね、これからは天国でおまえのことを見守つてくれるんだ」

「いつか、ぼくがしんだら……おばあちゃんにあえる？」

「天国にいけたら会えるよ。だから、ちゃんといい子にしてなくちゃね」

キヤサリン・テイラーの孫らしき幼子に、その両親が優しく諭している。

## 神学校と日課

小鳥が轟る早朝。  
神学校の敷地を彩る青い「アジサイ」に、一人の青年が水をやつていた。

黒髪黒瞳という異国の容貌以外にさして特徴はない。  
ただ、二十代後半といつ年齢にしては霸気がなく、目元の隈が目立っている。  
それは過去の労苦を示しているようでもあり、ただの寝不足であるようにも見えた。

青年 イロハ・イチジョウにとつて、水やりは朝の日課だ。

イロハが籍を置くのは、博愛の神とその精神を敬い、尊び、学ぶ、  
神学校。

そのため、学生には何らかの奉仕活動が義務づけられている。

学校や寮、あるいは近隣地域の清掃活動を選ぶ学徒が多いが、イロハのように水やりでも構わないし剪定などでも問題ない。

とにかく自主的かつ継続的に行動することが求められているのだ。

「……今日あたり降つてくれないかね」

イロハが見上げる空は、真っ青だった。  
西を眺めても雲はない。

青い花と緑の葉に水を投げかける。

アジサイたちはイロハ当人と同じく、今ひとつ水汽に困りました。

アジサイが花を咲かせるこの時期 ヤマトの梅雨ほどではない  
が ロンバルディア王国には雨が多い。

雲一つない快晴から急に天気が崩れることがままある。  
とはいえ、一週間雨が途切れることもまた珍しくなく、現に今日  
で六日間雨がなかつた。

わりと丈夫な植物とはいって、少々きつい環境だ。  
水やりを絶やせないイロハにとつても辛い。  
降雨がない分、水量は大雑把でも構わないのがせめてもの救いだ  
らうか。

イロハは敷地に流れる水路から水を補充して作業を続けながら、  
神学校を象徴する教会堂の前へやつてきた。

教会堂の重厚な扉はまだ閉ざされている。

収容人数は神学校の学生数とほぼ等しい四百名ほど。

高さが二十メートルを超える屋根には尖塔が三本、山の字を連想  
させる形と高さで並んでいる。

大小様々な窓はステンドグラスで装飾されていて、外から見ると  
何の変哲もないが内部には美しく荘厳な光の絵画を演出しているは  
ずだ。

イロハはこの教会堂が苦手だった。

理由はよくわからない。

ここは主である司祭への感情とは関係なく、あまりいい気分にな  
らないのだ。

本能的な忌避感がある。

それはもしかしたら、教会堂の前に広がる広場を囲つゝに植えられたアジサイのせいかも知れない。

赤いのだ。

神学校内で咲く他のアジサイはどれも青いのに、こここのアジサイだけ赤い。

イロハは別に赤が嫌いなわけではない。

アジサイは青系統の方が雨に映えると思うが、赤系だって悪くはない。

イロハが生まれたヤマトの秋にも赤が多いし、むしろ赤は好きな色だ。

だが、こここのアジサイの赤はよくない。

どこか病的で、禍々しい気がして

「おっはよーさん」

イロハは挨拶が聞こえた方へ顔を向けた。

イロハが来たのとは反対方向から、神学校の黒い制服を着た二十歳前後の女生がやってくる。

「ああ……おはよう」

「今日も元気そうだねえ、イロハくんは

そう言って、同じく水やりを奉仕活動に選んでいるフランシース・レクレールは微笑んだ。

金の髪に青い瞳は珍しくないが、イロハと同じく数少ない異国の出身者だ。

それ故にイロハとは気安い仲だつた。

「そんな夜遅くまでなにしてるか興味あるなあ」

「……勉強だよ」

「ウソばっかりー。それで授業中に居眠りじや、本末転倒だもん」

神学校は司祭などの神職を目指す者たちが集う教育機関だ。  
宗教由来で国に属さないため、身分・国籍は不問。

イロハやフランシースのような異国人も教義的には差別されることはない。

また、年齢も十代後半から四十代までと、神職を目指す者たちに広く門戸を開いているのがうかがえる。

反面、生死を司る職を目指す以上、在学時に課せられる試験は厳しく、卒業できるのは入学時の半数以下と言われている。

「でもさ、わたしらの学年つてまだ誰も落第してないよね?」

「これからは厳しくなるんじゃないかな?」

イロハたちは第二学年だが、一、二年時は基礎的な講義ばかりだった。

天葬の付き添いも第三学年からだ。

「第一号にならないでね、イロハ」

「フランの方が成績悪くなかったか」

「ぐ……今に見てなさいよ。首席で卒業してやるんだから」

二人は赤いアジサイに水をやり、校舎へ歩いていく。



桜の花弁が舞う中、少年は走っていた。

何かから逃れるよ'り」。  
何かを求めるよ'り」。

少年が目指しているのは、幼馴染みがいる神社だった。

「……かえでっ」

少年は幼馴染みの名を呼びながら階段を駆け上がった。  
彼女が住む家の戸を叩く。

反応はない。

焦燥に駆られ、何度も戸を叩き、何度も声を上げた。  
けれど 幼馴染みの少女もその家族も、誰も出てこない。

隣の家と同じだった。

やはり消えてしまったのだ。  
少年の家族のように。

「そ、そんな……」とつて……

少年は恐る恐る、叩いていた戸に手をかける。  
隣家のときは中に入るようなことはしなかった。

だが、ここには大事な幼馴染みの家。

彼女たちの安否を確認せずにいられなかつた。

「かえで……？」

少年は恐る恐る足を踏み入れる。

室内はたいして暗くないのに、真つ暗闇の中にいるような錯覚に囚われる。

足が震え、進路が定まらない。

それでも、恐怖を噛み殺して家中を探して回つた。  
請うように願うように、少女の名を呼びながり。

しかし、当たつてほしくない予感は当たつてしまつ。

幼馴染みの少女もその両親も、いなかつた。見つからなかつた。

少年は少女の家を飛び出した。

一縷の望みにかけ、少女がよく一人で稽古をしている神社の裏手へ走る。

砂利を踏み散らすたび、胸の中から何かがこぼれていくようだつた。

結局、そこにも少女の姿はなかつた。

少年は桜の花びらがまばらに散つている地面に膝をつぐ。

「父さん、母さん……かえで……みんなどこにいたんだよ……」

農作業をしていた父親は、少年の田の前で光になつて消えた。

着ていた服を、足下に残して。

少年は慌てて家に戻ったが、母も祖母もいなかつた。

ただ軒先と台所に、二人が着ていたはずの服が投げ出されていて。  
。

誰もいない家で一晩を過ごし、家族も幼馴染みも戻つてこないと悟つて、少年は町に出た。

人の姿を探して。

それから一年以上もの間、少年は人と出会うこととなかった。

「…………。起きてつてば」

「あー……」

机に突っ伏していたイロハは背中を叩かれ目を開けた。

「おはよ。お昼食めに行こう

傍りに立つフランシースに胡乱な目を向けた後、イロハは頭を振った。

「…………へや、なんで今いり」

「どしたの。ちょっと顔色悪いよ?」

「嫌な夢見た

背もたれに体重をかけ、天井を見上げる。  
最悪な気分だった。

神学生たちが退席していく中、フランシースがイロハの隣に座る。

「どんな夢だつたの?」

「夢といふか、昔の…………記憶だな」

「あー…………ヤマト出身だもんね、イロハは

およそ二十年前 ヤマトとこつ國せ、なくなつた。

西方の国に取り込まれたというわけではない。  
文字通りの意味で、なくなつたのだ。

住んでいた人間がすべて消失した、という形で 。

その詳細は西方にはほとんど伝わっていない。

それが起きたのが知名度の低い極東の国だつたせいもあるだろう  
し、その出来事そのものが忌避されているせいでもあるだろう。  
西方では誰もその話題に触れたがらない。  
國も個人もヤマトで何が起きたのかを知りうとしないのだ。

無人となつた土地に入ろうとする者も皆無だつた。  
盗みを生業とする人間さえも、廃墟と化したヤマトには立ち入ら  
ない。

そして現在、西方の国々ではヤマトという國が存在したことすら  
忘れられている。

「あれでしょ、國に帰つたらみんないなくなつてた、つて……」  
「ああ……」

生き残つたのは諸外国との外交や交易に携わり、國外にいた人間  
だけだ。

世界全体で数えても、ヤマトの生き残りは三桁止まりだろう。

イロハもその中の一人、ということになつていて。

「あ、いなくなつたで思い出した。気になる噂があるんだよね  
「噂？ ヤマトの？」

「違う違う、神学校のことで。知らない?」

「あ。どんな噂だ?」

「神学校の学生が消されてる、ってやつなんだけど」

「 それ、詳しく述べてくれ、フラン」

イロハは机に手をつき、フランシースに勢いよく顔を近づける。

「うわ、食いついた」

「いいから」

「んー、食堂でつい言いたいとこりだけど……ま、いいか」

イロハの顔を押しやりながら、フランシースは話し始める。

「えーとね……神学校の生徒がね、服を残して消えちゃつてるらしいの」

「それは、この神学校の話……じゃ、ないよな」

「それどころか国外の話だよ。姉さんからの手紙に書いてあつたんだから」

フランシースの姉はロワール王国にいる。

今でこそ手紙のやりとりをしているが、フランシースが異国の神学校に通っているのは姉との確執が原因だとイロハは聞いていた。

なにやら、司祭を目指すのを頑なに反対されたらしく。

理由を聞いてもはぐらかされるばかりで答えてもらえない、結局フランシースが家を飛び出す形になつた、と。

フランシースが神学校に入学してからは、もう仕方ないとこいつで関係はそれなりに修復されたようだ。

「消えたのも一人一人じゃなくて、神学校」となんだって

「学校」と?」

「そ。学生も教師も司祭様もまとめて……何百人もいっぺんに

規模の大きさに、イロハはさらに興味を引かれる。

「一校だけじゃなくて、何校も。だから噂になつてゐみたいで……」「特に騒ぎになつてない理由もそれか……」

「たぶんね。本当に起きたことだつて思われてないんだよ。わたしも信じられないし……イロハの感想は?」「あるのか、つて……感じだな」「あるのか、つて……感じだな」「……ある?」「俺が知る限り……」

思わず本音を出しけれ、イロハは口もつた。

「ん? なに?」

「いや……。それつて、神学校が狙われてるみたいな話だと思つか?」

「どうだろね。でも、本当だとしたらそんなんじゃないかな。犯人は魔女だつて言われてるらしいし」「

数百人単位での失踪 消失。

自然現象なら神学校にばかり当たるのは不自然だ。  
だとすれば、それを引き起こした存在がいる。

そして 規模は段違いだがヤマトで起きた人間消失もまた、誰かがやつたということになる。

「魔女か……会ってみたいな」

「ちよつと……やめなよ？ 噂がほんとだつたら逆われちゃうつてことじやない」

「神学生だつて知られなかつたらいい。それに、目があつただけで消されるなんてことはないはずだ。神学校の敷地外で会えれば……もつと詳しい話、姉さんに聞けないか？」

「まつたくもう……意外と向こう見ずなんだから」

フランシースは呆れたように溜息をつき、席を立つた。

「その話は後、お皿い皿ごが先！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4427ba/>

---

十三番目の秘術

2012年1月12日18時58分発行